

# 幼児教育における「手遊び」の教育目的および教育効果に関する研究

## — A study for educational aims and results of Hand Play in Early childhood education —

星原 薫 佐藤 史人  
Kaoru HOSHIHARA Fumito SATO  
(大阪市立公立幼稚園) (和歌山大学教育学部)

2014年9月30日受理

### 抄録

児童文化は絵本、唱歌、詩歌、紙芝居等の多様な形態とそれぞれの成り立ちを持っており、子どもの生活に深く根ざしている。教育においてもその価値や効果に着目して、幼稚園等の教育実践においては日々の活動に不可欠なものとなっている。児童文化の研究では、その解釈や意義に論究しており、一定程度研究の蓄積があり、教育学研究としてもその価値が認められている。本研究ではこうしたこれまでの研究を基に、手遊び歌の背景、内容、意味等に関して、特に幼児期における「手の労働と遊び」の観点から若干の考察を試みる。

#### 1、研究の目的

現在、日本幼年教育研究会<sup>1</sup>などの教育関係機関による保育者向けの手遊びや粘土・画用紙などを使用した製作・制作、歌唱等の保育活動に関する実技セミナーが行われている。このようなセミナーでは、手遊びに関する本や楽譜などを買い求める保育者が大勢いるという。このことは、教育現場の保育者にとって、このような実技活動が重要視されていることの一端を示している。

幼稚園で扱われている活動は、先に述べたように、手遊びや製作・制作、歌唱などがある。保育者はそれぞれに教育的な効果をもって活動を行っている。製作・制作であれば、子どもの創造力や表現力を養うことであったり、歌唱であれば、子どもたちの音楽に対する興味関心を引き出したり、音域を広げる可能性を広げること<sup>2</sup>などが挙げられる。また、手遊びについては、決まった時間を設けることなく、活動の合間や次の活動への導入として活用されることも多く<sup>3</sup>、その時々で目的が大きく変化している活動だといえる。

手遊びは、「歌」と「動き」を伴う遊びであり、その「歌」も「動き」も伝達の過程で単純化されたり、覚えやすく歌いやすい、活動として取り入れやすいものになるなど、変化し続けている<sup>4</sup>。また、手遊びの教育効果については、斎藤葉子らによると、手遊びは子ども同士・子どもと保育者間のコミュニケーションツールとして、また、保育者に注目させるための教材として、そして、想像力を刺激したり、手指の器用さや知

識を子どもたちに与えるといった教育効果のある実技として記されている<sup>5</sup>。このように、教育現場の保育者にとって「手遊び」とは、子どもとともに遊ぶ道具としてだけでなく、手指の発達やリズム感を養うための手段や、集中させるための方便としてなど、多様に捉えられているということが分かる。さらに、手遊びの中でも、作詞者・作曲者ともに「不詳」「わらべうた」となっているものが数多くあり、誰がいつ作ったものなのか、どのように伝わったのかが明確でない手遊びが存在している。これは手遊びの成り立ちについての一つの特徴であると言える。これらが存在する理由として、子ども同士の遊びの中で生まれたものが歌い継がれていたり、保育現場での子どもとの関わりの中から生まれた手遊びが伝わってきているからであるとされている<sup>6</sup>。この考えは遊び続けられていることの一つの理由としての可能性は考えられるが、当然のことのように保育現場の教師たちに受け入れられているということに問題があると考えられる。

本研究においては、「手遊び」の定義や歴史的背景を考察することを通して、幼児教育における「手遊び」の教育価値を検討する。加えて、幼児教育におけるその意義や効果について若干の考察を行うことを目的とする。

#### 2、幼児教育における「手遊び」

##### (1) 幼児教育とは

幼児教育の定義として、広義には幼児を対象とする

教育の総称である。すなわち、幼稚園や保育園のような施設で行われる教育だけでなく、家庭や地域社会が行う教育的なはたらきかけを指す。狭義には幼児を対象とした教育施設における教育を意味する。わが国の「幼稚園」と「保育園」のように、教育を目的とした施設と子どもの保護を目的とした福祉施設とが別々に存在する場合には、前者で行われる教育だけを「幼児教育」と呼ぶことが多いが、幼児の保護を目的とした福祉施設の活動は必ず教育を含むものである。幼児教育が対象とする「幼児」とは、教育制度上は義務教育を行う学校に就学する前の幼児を指すことが多いので、幼児教育と同義で「就学前教育」という名称がつかわれることが多い<sup>7</sup>。このように、『教育学大事典』では幼児教育をする“場”にとらわれたものとなっている。

戦後改革期から議論され続けているように、現在の日本の幼児教育は保育一元化問題を抱えている。この議論の中で注目されているのは、主に子どもを保育・教育する“場”を一つにするということであり、この場合必要となってくるのは、幼児教育の重要性や必要性について考え、幼児期にすべき教育についての共通理解を持っておかなければならないと指摘されている<sup>8</sup>。ここでいう共通理解とは幼児教育における教育内容や活動についての理解である。

また、莊子雅子は「幼児期の教育は、気候や風土が人間を化するような自然的な教育といってよい」と述べている<sup>9</sup>。ここからわかるように、幼児教育にあたって、われわれ教育者は知識や生活習慣を教え込むのではなく、幼児をとりまく環境を教育的にし、その環境のなかで幼児に影響を与えることに努めなければならない。そうするうちに幼児期に身につけておくべき知識や生活習慣が習得されるようにすることが幼児教育をするということなのである。

今回の研究では、学校現場における幼児教育について検討していくため、保育園などの子どもの保護を目的とした福祉施設は含まないこととする。

## (2)現在の遊びの役割

現在の学校教育においては、幼稚園教育要領<sup>10</sup>によると、幼児期の生活すべてを通して基本的な習慣を身につけることを主な目的としている。また、幼児期に身につけなければならない習慣のほとんどすべては、健康に関する習慣である。基本的習慣の形成について、莊子雅子は、主として排便・食事・睡眠・清潔・着衣などの習慣であると指摘している<sup>11</sup>。また、基本的習慣の範囲としては、行動のみに限らず、考え方や感じ方にいたるまでのいっさいを含むとしている。幼児期はこのような行動の習慣が形成されていく時期であり、この時期を逃すと、容易に形成することができないとされている<sup>12</sup>。そのかわり、この時期に形成された習慣は、その後一生を通じて容易に消えることはない<sup>13</sup>。そ

こに幼児期における習慣形成の重要な意義がある。この時期に形成された習慣が子どもの将来に重大な影響を与えることを考えると、幼児教育においては基本的な習慣の形成にいっそう重きをおかなければならないということを示している。このようなねらいを達成するためには、幼児教育における具体的な教育内容として、遊び、リズムと音楽、言語、観察と見学、描画と製作・制作などと区分されるものが挙げられる<sup>14</sup>。

これらの教育内容の中でも最も多くの時間を費やすのは「遊び」の時間であり、身体的・運動的発達を促す動きのある遊びや、人間関係の在り方や社会のルールを学習することができるような遊び、創造性を高め、知的発達が可能になる遊びなど、様々な体験ができる場として重視されている<sup>15</sup>。「遊び」と一括りにしてみても、独り遊び、並行遊び、集団遊びのように発達段階によるものや、ごっこ遊び、運動遊び、構成遊び、手遊びなどの具体的な遊びのように多様であり、それぞれの遊びに目的、効果を見出すことができる。

また、これらの教育内容の中でも、行動の習慣づけに適しているものの一つに、「手遊び」による反復運動が挙げられる。昼食前後に歌う「お弁当のうた」「歯磨きのうた」のように、生活習慣に沿った言葉と動きを伴った手遊びが多く存在している。そして、このような手遊びを保育者が選択し、適した場面で工夫して活用することで、生活習慣の定着を図るという方法がある。実際の教育現場において、自然に楽しく意識的な反応を効果的に高めるための教材としての「手遊び」の利用価値は重視され<sup>16</sup>、その結果、生活習慣が身に付くなど教育効果は大きい。

ところで、今まで論じてきたことを見ても分かるように、「手遊び」における教育価値の中には行動の習慣づけももちろん含まれるのであるが、「手遊び」はそれだけにとどまらない。他にも、手指や身体で表現すること自体に楽しさを見出すという側面に着目し、子どもたちの感情を自由に表出することができるような働きかけをするという教育効果もある。このように「手遊び」そのものの価値を理解し、活用していかなければ、本来の教育効果は得られない。しかし、この「手遊び」自体の持つ手の労働、作業的側面を重視することなく、教育現場での一種の手段として活用しているという現状がある<sup>17</sup>。

## (3)幼児教育の中の「遊び」

遊びには多様な側面があるため、遊びを一律に定義することは難しいが、基本的には、生活維持活動に関与せず、楽しむこと自体を目的にした自由で自発的な「おもしろさ」を感じる行動をいうとされている<sup>18</sup>。しかし、ある行動におもしろさを感じるかどうかは個人によって異なるため、行動の内容から遊びであるか否かを区別することはできない。

フレーベル(Fröbel, F.)は、子どもの活動のほとんどが「遊び」であり、遊びこそ子どもの持つ可能性を発展させる唯一の手段であると考え、教育に適用した最初の人物である。彼はすでに1823年頃から、幼児教育の根本は何よりもまず幼児を遊ばせながら導くこと、すなわち遊びで指導すること、また楽しませながら幼児の力を発展させることに努めなければならないという意識を持っていた<sup>19</sup>。そして彼はおおよそ次のように述べている。

〈遊ぶこと、または遊びは、この時期の人間、すなわち幼児や児童の発達の最高の段階である。なぜかと言えば、遊びとはその言葉(ドイツ語で Spiel)が示しているように、子どもが自分の内のものを自分で自由に表したものであり、自分の内の本質の必要と要求とにに応じて内を外に表現したものであるから、遊びはこの時期の子どものもっとも純粋な精神の産物であり、それは同時にまた人間生活全体の模範ともいべきものである。〉

つまり、彼は幼児の創造的な自己活動である遊びや作業を重視し、とりわけ遊びは幼児が最も自己表現をする活動であるとして、非常に高い価値を置いたということである。また、彼は遊びを「子どもの内から出る貴重な体験」として捉えているのである。そして、彼は幼児期こそ人間が将来の勤労や勤勉、生産活動のために受胎されねばならない時期であると述べている<sup>20</sup>。

このようなフレーベルの「遊び」はいわゆる遊びとしてだけでなく、詳しくは後述する「手の労働」としての要素も含まれている。それは端的に言えば、人間の営みの一端を担っていると言うことができる<sup>21</sup>。人間の文化として「遊び」を位置づけることは現代の幼児教育においても一つの目的になりえる。

フレーベルに続く教育学者として、モンテッソーリ(Maria Montessori)が挙げられる。彼女は自分の名前を冠したいわゆるモンテッソーリ・メソッドという教育体系の創始者として知られている。モンテッソーリ・メソッドの特徴とは、自由な環境における成長を第一に、適切な時期に、独自に考案された教具を使って、最も効果的な仕方成長を後押ししようとするものであるといえる<sup>22</sup>。ここで言う「適切な時期」とは、モンテッソーリ教育における概念の1つに挙げられる「敏感期」のことであり、子どもたちが視覚対象や言語、数、運動など、さまざまな特定のことに對して、強い感受性を持ち、その対象物を一気に吸収してしまう時期のことを言う<sup>23</sup>。このような言語や数、運動などは「手遊び」を構成する要素であり、このことから、幼児期における「手遊び」の重要性が示唆される。また、「独自に考案された教具」とは、例えば細長い棒を

差し込むだけの感覚器官訓練のための用具や、読み書き、算数と言った学習活動に関する用具などのことを指す<sup>24</sup>。

彼女にとって教育とは「子どもが人として生きていくことができるように手伝うこと」だとしている<sup>25</sup>。そして、モンテッソーリの教育理論において重要となるのが、大人は一人ひとりの子どもを尊重し、その子どもの活動選択の自由、その選んだ活動に十分取り組める自由を保障するということである。このような整った環境の中で自発的に内面の要求にしたがってやりたいことを選び、活動することで初めて望ましい効果が得られるとしている<sup>26</sup>。こうした子どもの特性とそれに合致する教育活動を施す具体的な手立てとして種々の教材・教具が必要となる。

これらのモンテッソーリの考えはフレーベルとは対立しているというように考えられている<sup>27</sup>が、幼児の「遊び」に関して言えば「子どもは自らの内面の欲求にしたがって活動し、実現していく」という考えであり、同様であると考えられる。さらに、モンテッソーリは、幼い子どもにとって良い環境を整え、子どもの自由を保障することによって、子どもの中にある内的生命力が発現し、自己教育を確立していくことを目標としており<sup>28</sup>、実現するためには独自の教具が必要だと言っている。そして、整った環境の中で自発的に内面の欲求に従って遊ぶことによる教育効果もまた、フレーベルに関する検討の際に述べたように、人間の文化、社会、生活などに関する基本的な内容や手段が内包される。これを実現する教材・教具として、幼児教育における「手遊び」はその教育価値を具現化する重要な役割を担うものと指摘することができる。

さらに「遊び」についての理論的な考察をしたのはフランスの社会学者カイヨワ(Caillois, R.)である。彼はホイジンガ(Huizinga, J.)の遊びの定義を批判的に検討し、遊びの本質を6つの条件を持った活動であるとした<sup>29</sup>。それは、

- ①自由な活動、すなわち、遊戯者が強制されないこと。もし強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという性質を失ってしまう。
- ②隔離された活動、すなわち、あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されていること。
- ③未確定の活動、すなわち、ゲーム展開が決定されていたり、先に結果が分かっていたりしてはならない。ある種の自由が必ず、遊技者の側に残されていなければならない。
- ④非生産的活動、すなわち、財産も富も、いかなる種類の新要素も作り出さないこと。
- ⑤規則のある活動、すなわち、約束事に従う活動。
- ⑥虚構の活動、すなわち、現実生活と対立的な非現実性という意識を伴うこと。

である。

また、カイヨワは遊びの分類において、競争・偶然・模倣・眩暈の4つのどれが優勢であるかによって、遊びを次の4つの項目に分類した。

- ① ゴーン(サッカーなどのスポーツや、ビー玉などの競争の形をとる遊び)
- ② レア(サイコロ遊び、ルーレット、宝くじなどの偶然を要素とする運試しの遊び)
- ③ ミクリ(ごっこ遊びや映画・芝居など模倣を要素とする遊び)
- ④ リンクス(空中ブランコ、回転木馬など一瞬だけ知覚の安定を崩して眩暈を楽しむ遊び)

このように、遊びの分類については、さまざまな視点からの分類が可能である。

カイヨワは社会学的側面から「遊び」を検討する際に、他の学者とは異なって、「遊びと文化は同時並列」であるなど、独自の考え方を示している<sup>30</sup>。これは、元の機能の退化によって子どもの遊びが生まれた(文化が先)のではなく、また、遊びが元となって文化が生まれた(遊びが先)のでもなく、むしろ遊びと文化の二つの分野の活動が同時に存在すると考えた方が妥当であると結論付けたのである<sup>31</sup>。いずれにしても、カイヨワのいう「遊び」とは、教育効果などについて触れていないが、社会的に価値のあるものと位置付けていることがわかる。社会学者であるカイヨワがこうして「遊び」に言及することは、幼児教育におけるその価値とは一致するとはいえない。しかし、社会学的側面から「遊び」を考察したという事実からわかるように、「遊び」は人間の社会的活動の観点からも重要であると位置づけられている。

幼児教育における活動の多くが「遊び」と呼ばれているにも拘わらず、これらの活動がカイヨワらの思想に基づく「遊び」に相当するかどうかは十分検討されていない。他にも、歌や踊りのように、感性や情感に基づく表現というような、いわゆる芸術的な表現活動は、文明化される以前から見られる原緒的な活動である<sup>32</sup>。こうした活動の一環として、「遊び」を位置づけることも可能であろう。

加えて、ピアジェ(Piaget, J.)らのように「遊び」を心理学的にみることもできる。中でもボイデンディーク(Butyendijk, F. J. J.)は、遊びを単純な機能とせず、児童力学の一般的特質の現れであると考えていた<sup>33</sup>。彼の言う児童力学とは、運動の無方向性、運動の衝動性、現実に対する実際の態度、現実に対するあいまいな態度の四つの特質から成ると考えている。また、ワロン(Wallon, H.)は、遊びを唯物論的弁証法の立場からとらえる。彼によれば、「遊び」とは、解放されて自由になった活動と、いつも統合されている活動との対立を克服しながら実現するものであるとする<sup>34</sup>。

このように「遊び」の位置づけは多様であり、直接

的に「手遊び」という用語は使用されていないが、それぞれの立場から幼児教育における「遊び」や「手遊び」の教育価値を見出している。そこで、今回の研究では「手遊び」に着目していく。個々の「手遊び」の成り立ちや、歌詞から見える教育的側面、またフレールベルなどの教育者たちがいう労働・作業としての側面から検討し、現代の「手遊び」の教育効果および教育目的について明らかにしていく。

#### (4) 「手遊び」とは

##### ① 定義

『現代保育用語辞典』<sup>35</sup>によると、「手遊び指遊び」の項目で、手遊びとは「音楽遊びの一部分であり、わらべうたの中にも多くある。しかし、伝承的なものだけでなく、『創作手遊び指遊び』も続出している。この遊びは、歌いながら手や指を動かして遊ぶ遊びで、場所を選ばず、どんな狭い空間でも行うことができ、リズム感も育つ」とされている。

また、『幼児保育学辞典』<sup>36</sup>においては、音楽教育面から見ると手遊びはわらべうたの中に分類されるのが一般的である。しかし旋律面から見ると、わらべうたが主に五音音階で日本独特の節回しなのに対して、手遊びは七音音階で出来ているものが多く、わらべうたと手遊びは別のものだという考え方がされている。

『保育小辞典』<sup>37</sup>では、手遊びとは「音楽をとめない歌いながら手指、身体を動かして遊ぶものをいう。(中略)わらべうたや外国の曲に振付されたものもある。」と示されている。

これらに共通するのは「歌」と「動き」を伴う「遊び」であることと、手指だけでなく身体を動かして遊ぶ遊びであるということである。このことから、手遊びには明確な定義や分類の基準はなく、曖昧であるということが明らかになる。

##### ② 「手遊び」の研究の背景

現在の教育学研究の中で行われている「手遊び」に関する研究の観点としては、たとえば、手遊びの種類と成り立ち、展開事例、本への掲載数、保育者や子どもの認知度などがある<sup>38</sup>。種類と成り立ちの研究については、現段階で存在する手遊びの数を集計し、それらを創作曲、外国曲、わらべうたなどの音楽的側面から分類しているものが見られる<sup>39</sup>。また、展開事例の研究については、考察する手遊びを絞り込み、その手遊びの展開・発展の可能性やその具体的活動に関しての研究が行われている<sup>40</sup>。しかし、現場の保育者が「手遊び」についてその教育目的、教育効果に対して自覚的であるかどうかについては明らかにはなっていない。

##### (5) 手の労働とは

『現代教育学事典』<sup>41</sup>によると、「機械の操作を中心

とする労働に対し、手道具を主として使用する労働を手の労働と称する」とされている。

子どもの遊びと手の労働研究会<sup>42</sup>によると、手の労働とは、手や道具を使ってものに働きかけ、そのものを変化させて自分の求めるものを作り上げる活動のことであると述べている<sup>43</sup>。また、「『手の労働』という言葉を使って、あらかじめつくり出すものを頭に描き、目的を持って作っていくという、人間の労働の特質を持った、本来の労働活動をあらわそうとしている」と記載されている。

また、機械労働は分業を特徴とするが、手の労働は、製品製作ならばその過程全体を行うことを特徴とする。現在の生産活動の多くが機械・装置に取って代わっているといっても、生産は人間の手から始まり、人間の活動の基本が「手の労働」にあることも変わらない。どれだけ工業や情報化が進んでも、基本的には、ものを作ることによって人間は人間にとって価値のあるもの、つまり“財”を生み出すことには変わりはない。このことこそが最も人間らしい営みの一つである。前述したフレーベルなどの論にも見られるように、幼児教育においては、人間の人間らしさを発達させることが目的であり、人間の諸活動の原初的活動が幼児の製作・制作活動などに投影される。その基本となるものが「手遊び」であるとして位置づけることができる。なぜならば、人間が文明化された最も象徴的な進歩は、二足歩行により手の自由度が増し、その手によってもづくりが始められた、すなわち手によるものづくり、「手の労働」こそが最も人間らしい行為の一つであると位置づけられるからである。「手遊び」は直接人間にとって有用なもの、つまり“財”とは言えないけれども、手に象徴される身体を使って表現することが「手の労働」へと続く最初の活動と位置づけられる。

### 3、「手遊び」の具体的検討

手遊びの中に出てくる生き物や場面、歌詞の内容は様々である。また、現在幼児教育の現場で利用されている歌を伴う手遊びの数に限って見ても、児嶋輝美が明らかにしたように、現在書店やインターネットで購入が可能なものに限定しても、冊数にして112冊(もとも出版年が古いものは1974年8月、新しいものは2007年9月である)、曲数にして3985曲の手遊びが存在しているとされている<sup>44</sup>。さらに、歌詞の内容が変化したものや、保育者独自のアレンジが加わったもの、また、歌を伴わないものなどを含めるとさらに膨大な数になるといえる。これらの手遊びを分類する観点としては、たとえば「変化してきた過程による分類<sup>45</sup>」「文化的背景による分類<sup>46</sup>」「活用法による分類<sup>47</sup>」など様々な側面から分類していくことが可能である。

先に述べたように、手遊びの題材となるものは膨大な数が存在するため、今回は児嶋輝美の研究をもとに、

掲載冊数の多い、いわば「定番」とされている50個の手遊びに焦点を当て、さらにその中でも最も掲載頻度の高い5曲について具体的に検討する。

#### ①「げんこつ山のためきさん」

この手遊びは、1970年にNHKテレビ『おかあさんといっしょ』という幼児向け番組で初めて取り上げられ、現在においても行われている手遊び歌である。作者については「わらべうた」という記載になっているが、一部を補正した作詞者・作曲者を記載している楽譜集もあり、旋律は4音階から成る。このように、一部が補正されている背景には、児嶋輝美が言うように、原曲のリズムや旋律が単純化され、音域が狭まるなどにより、覚えやすく歌いやすい曲に変化することがある<sup>48</sup>ということが関わっている。

そして、一般的に知られているのは、歌の最後にじゃんけんをして勝敗を決める形式で、約40秒の手遊びである。歌詞については、〈げんこつやまのためきさん〉の始まりの前に、「せっせっせーのよいよいよい」という掛け声が入るか入らないかの違いはあるようだが、その他はほぼ同じである。また、手遊びとしてもあまり細かい動きはなく、歌も比較的短いので、乳児から実践することができる。発達段階に合わせた発展の可能性としては、手遊びを終えた後のごっこ遊びや、狸が登場する絵本の読み聞かせへの展開などが考えられる。

この手遊びの歌詞は 〈げんこつやまのためきさん おっぱいのんで ねんねして だっこしておんぶして またあした〉というフレーズの繰り返しとなっており、狸の親子の仲睦まじい様子を思い浮かべながら遊ぶことができる。また、この手遊びに限らず、フレーズや同じ動きの繰り返しは、他の手遊びにもよく見られる。これは、遊びの中で多様な動きが経験でき、何度も繰り返すことにおもしろさを感じるという幼児の特性<sup>49</sup>を踏まえて作られているからである。

この手遊びの中では、幼児が歌詞に出てくる子狸の様子を模倣することで、人間としての自分の成長を実感することができる。また、手の動きについてフレーズごとに見ていくと、まず〈げんこつやまのためきさん〉の部分は、握りこぶしを作り、回転させ、特に狸の姿かたちを模倣するといった動作ではないけれども、次の動作への準備となるような動きである。次の〈おっぱいのんで〉の部分は、実際の狸や人間の行動には見られない、両手を使って乳を搾るといった動作が見られる。また〈ねんねして〉の部分でも、両手を合わせ顔の横に添えて首を傾げる動作で、就寝準備状態を抽象的に表す動作を取り入れている。続いて〈だっこして おんぶして〉では、人間に見られる愛情表現の一つともいえる行動もまた、象徴的に表している。最後の〈またあした〉では、子ども同士でじゃんけんを

して勝敗を楽しむ遊びとして終える。このことからわかるように、手遊びの中では動物に擬人化した行為として表されているそれぞれの行為や動作は、実際の生活の中に見られる行為ではない。しかし、人間固有の手を使う行為・動作を取り上げ、さらに愛情や慈しみなどの感情を抽象的・象徴的に主に手の動作によって表現することは、人間そのものの文化や特性が「げんこつ山のためきさん」の中に取り込まれている。

## ②「大きな栗の木の下で」

この歌は、イギリス民謡をもとにした童謡である(英題: Under the spreading chestnut tree)。日本に伝わったのは太平洋戦争後にGHQの人々が歌っていた曲を聞き伝えて歌い出したことがきっかけだといわれている<sup>50</sup>。この歌はもともと、アメリカのYMCAの活動やボーイスカウト、ガールスカウトなどで歌われていたレクリエーションソングである<sup>51</sup>。したがって、日本のわらべうたに見られるような旋律に関する特徴は見られない。そして、NHKテレビ『うたのおじさん』で動作をつけて歌ったことによって広まり、現在も歌い継がれている。2007年に日本の歌100選に選ばれた事実を見てもわかるように、日本において広く知られている手遊び歌である。また、長さも約30秒と短く、動きも細かいものはないため、発達段階を一つの指標として考えると3歳児から行うことができる手遊び歌である。さらに、発達段階に合わせて4歳児5歳児に合わせた手遊びに発展していくにあたって、新しく動きを加えたり、テンポを速くするなどの教育上の変化や発展が可能な手遊びである。

歌詞に注目すると〈大きな栗の木の下で あなたとわたし たのしく遊びましょう 大きな栗の木の下で〉となっており、基本的には2人で言い、相手の存在を意識しながら行うコミュニケーション手遊びである。歌詞の中の「たのしく」の部分は、現在では「なかよく」が一般的となっている。また、日本で歌われている歌詞は日本語の意識であり、原曲の歌詞は〈Under the spreading chestnut tree, There we sit both you and me. Oh, how happy we will be! Under the spreading chestnut tree.〉である。これを見てもわかるように、基本的な歌詞の内容は同一である。

さらに歌詞の内容を検討すれば、「大きな栗の木の下で」の歌詞は、〈あなたとわたし〉の部分から後半になるように、二部構成になっている。前半部分では〈大きな栗の木の下で〉という場所を示しており、コミュニケーションをとる相手との関わりはない。前半部分での動作は、頭から膝にかけての手の的確な動きや俊敏性を重視している身体活動を主なねらいとしている。後半部分では、子ども同士のコミュニケーション活動が主題であると考えられ、〈あなたとわたし〉という部

分に見られるように、相手を認識してコミュニケーションをとるような動作が取り入れられており、このことはこの手遊びの重要な特徴として着目できる。すなわち、コミュニケーションは最も人間らしい活動の一つであり、これを手遊びとして表現しているといえる。

## ③「靴屋のおじさん」

この歌は別名「いとまきのうた」として知られており、原曲はデンマークの遊び歌「Shoemaker's Dance」である。この手遊びが初めに紹介されたのは大正時代、土川五郎によってであり、「律動遊戯」の教材として「かいぐり」という題で取り扱われ、教育現場に取り入れられたとされている<sup>52</sup>。作詞者については不詳、作曲者はデンマーク民謡とされている。しかし、他にもアメリカやフランスにも同様の遊び歌が存在する。アメリカ版は「Wind the Bobbin Up」であり、日本と同じように“糸巻き”を意味する。歌詞や手遊びの動きをとってみても、日本の「いとまきのうた」との類似点が多くみられる。次にフランス版は「Enroulez le Fil」であり、歌詞は日本語版の1番の冒頭にあたる〈いとまきまき いとまきまき ひいて ひいて とんとんとん〉の部分のみ歌うのが一般的である。手の動きに関しても、糸を巻く動きや、糸を引いて手をたたく動作が類似していることが分かる。最後に、デンマーク版は「Shoemaker's Dance」であり、内容としては他国と異なって、靴を作る職人の作業が描写されている。歌詞の中に糸を巻き上げる部分は見られないが、靴を作るという点は日本版の1番の内容に類似しているといえる。

歌は全部で4番まであり、幼児教育で行われる他の手遊びと比べると長編である。日本で遊ばれている手遊び歌の歌詞は、1番では糸を紡いで、小人にあげるための靴を作りそれを届けに行こうとする場面で、2番は麦畑で収穫した麦を使ってパンを作り、届けに行こうとする場面となっている。次に3番では落とし穴を作って熊を退治し、小人の家へ向かうという場面で、最後の4番では小人のために火を焚いてスープを作り、やっと小人の家に着いたと思えばそこは夢の国だったという物語になっている。

以上のように、この手遊びは最初から最後まで行うと一つの物語ができあがるというもので、子どもの想像力を刺激しながら、行うことができる。旋律面で見てみると、やはり原曲はデンマークの遊び歌ということからもわかるように、わらべうたとは異なって、4音階、5音階ではできておらず、さらに、四分音符や八分音符、同じ高さの音符同士のタイによるリズムの変化などが特徴として見られる。

この手遊びの中では、登場人物が小人という架空の生物であり、相手のために何かを作り、それを届けるといった、日常生活での相手を思いやる心や、人のた

めに働くということを表している。また、前述した歌詞を見ても分かるように、1番では衣料生産としての糸紡ぎや機織り活動、2番では食料生産としての農業、3番では人間にとって不利益なものを排除し乗り越えようとする行為、4番では生産した食料をさらにおいしく食べやすくするという調理すなわち文化的行動などの人間の社会的活動が表現され、人間らしい活動の特徴的部分を取り上げている。また、これらすべてを手で再現するということから、すべて手が作り出した物、現象であると言うことができ、「手の労働」に当てはまる効果が見られる。

#### ④「山小屋いっけん」

元はアメリカ民謡であり、英題は「LITTLE CABIN IN THE WOODS」、日本語の作詞者としては志摩桂である。アメリカで子どもたちに親しまれていた遊び歌であり、日本でも1971年から放送されていたアメリカのテレビ番組「セサミ・ストリート」で歌われ、全世界に広まったとされている<sup>53</sup>。「セサミ・ストリート」とは<sup>54</sup>、1969年11月10日に第一回目が放送され、多民族からなる多世代に亘る、そして多様な生物種からなる住人たちが、この市内の通りに共存するという設定であり、子ども番組の歴史上かつてあった番組とは全く違ってたとされている。この番組を通して、視聴者たちに生活の中での手本を提供しつつ、子どもたちに誰もが社会に特別な能力を持って参加出来るのだと言う事を教えていた。この番組の教育的な目標としては、就学前の子どもたちに抽象的な表現や、認識の過程、そして子どもたちの置かれた物質的及び社会的環境を教えることであった。例えば、多くの数を扱った遊び歌が用いられていたり、2000年代にはハリケーンについてや、2001年9月11日のテロ攻撃にまつわるエピソード等の今日的な意義のある論点を子どもに適した方法で表明した<sup>55</sup>ことから見てとれる。このような番組で取り上げられるということから、「山小屋いっけん」の手遊び歌には生活の教訓的な要素や教育的要素が含まれているということが考えられる。この手遊びの歌詞に出てくるのは山小屋に住んでいるおじいさんと可愛いうさぎで、猟師の鉄砲に怯えたうさぎを助けるという物語になっており、約30秒の手遊びである。音楽的特徴としては、8分音符と4分音符で構成されており、一定のリズムで歌うようになっている。また、2小節ごとに歌詞と音符が区切られ、1音ずつ音階が上がっていくという特徴がみられる。

手の動きについては、〈山小屋一軒ありました 窓から見ているおじいさん〉という部分では、大きな家の形を空中に描き、次に四角い窓の形を描いて額に手をあてて覗く。〈かわいいうさぎがびよんびよんびよんこちらへやってきた〉では、手をチョコキの形にしてうさぎを表現し、跳ねさせるなどの動きをして、自分の

方へ近づける。〈助けて助けておじいさん 猟師の鉄砲こわいんです〉の部分は、両手をパーにして左右に振り、手で鉄砲を形作って撃つ真似をする。最後の〈さあさあ 早くおはいりなさい もう大丈夫だよ〉では、うさぎを呼ぶように手招きをし、片方の手でチョコキをしてうさぎを作り、もう片方の手でそのうさぎを撫でる動作をする。動きの発展としては、手だけを使ってうさぎなどを表現するのではなく、幼児同士ペアになってうさぎ役とおじいさん役などを決め、一緒に表現を楽しむことも可能である。

歌詞については、原曲がアメリカ民謡であるということからもわかるように、「山小屋」「猟師の鉄砲」「うさぎ」というような、現代の日本では馴染みのないものではあるが、狩猟が主な生産活動であった時代の生活を反映した歌詞になっていることがわかる。かつての人々は森の中で狩猟をして生活しており、その中で猟師が鉄砲を使用して食糧となるうさぎを狩るという行動は、彼らが生きていくために必要な活動である。したがって、この歌にでてくる「おじいさん」は、彼らからうさぎを守るということで、彼らから食糧を奪うということになる。「山小屋いっけん」の日本語の訳詩はテレビ番組を通じて広まったということからも分かるように、比較的新しい成り立ちの歌であり、この頃には動物愛護の考えが広まっていた時代でもあるため、猟師からうさぎを保護するという物語になったという可能性が考えられる。

歌詞と手の動きの関係性については、〈助けて助けておじいさん〉という、うさぎが助けを求める場面のみ、両手を振るという抽象的な表現があてられているが、残りの場面はすべてその歌詞に出てくるものを模倣するというような形がとられている。手の労働という観点から見ると、実際に手遊びの中で現代の人々の生活を表現するような動作はないけれども、かつてのアメリカ人の生活様式を歌詞の中に反映しているという点では人間固有の行動を表現していると言える。また、歴史的活動を取り入れているという面でも、過去を保存し伝えていくという役割も担っていると考えられ、手遊びが発生した時の背景を読み取ることができる。

#### ⑤「お寺のおしょうさん」

この手遊びは伝承的な日本のわらべうたであり、成り立ちや歴史的背景については不明である。この手遊びに限らず、児嶋輝美によってまとめ挙げられている50曲の中でも、作詞者・作曲者ともに「不詳」「わらべうた」となっているものが少なくとも20曲あり、これは手遊びの一つの特徴であると言える。先述したように、このような成り立ちが不明な手遊びについて、現在まで伝わっている理由を当たり前のように受け入れ、それ以上追及することがないという部分に問題があると考えられる。誰によって作られ、どのように伝わってき

たのかが不明であるのに、今日まで保育現場で活用され続けてきたことの背景には、手遊び自身に伝承するだけの魅力があるということになる。これらを教育の現場で活用する理由としては、教師に注目させるためや、その場をまとめるためというような方策・手段としての活用理由も存在するが<sup>56</sup>、それだけではない。特に歴史的な側面から見ていくと、テレビ番組やラジオ番組などを通して広まったとされている手遊びよりも、成り立ちの古い手遊びの方が、その当時の人々の生活様式や人間独特の営為について取り込まれているということがわかる。

手遊びの種類としては、①「げんこつやまのたぬきさん」と同じように「せっせっせーのよいよいよい」という掛け声で始まるじゃんけん遊び歌であるため、2人以上で行う遊びである。この手遊びの音楽的特徴としては、3音階で構成されており、リズムも一定で、これはわらべうたによく見られる形式である。

歌詞については、お寺の和尚さんが蒔いたかぼちゃの種の成長に合わせてじゃんけんをするというものである。農業をして暮らしていた人々にとって、和尚さんとは宗教家であるとともに、農作業についての知識も豊富で、橋を架けるなどの土木工事を行うというように、庶民にとって技術者として有能な存在であり、特に農作業については、米だけではなく新たな飢饉の際にも強く育つ作物を伝授するなど農業技術の指導的役割を果たしており、人々の生活を助けていた。農作業については、人類学の研究、特に自然人類学と人類進化論において、狩猟や採集によって自然界から得られる動植物を、人間自身の手によって、計画的に生産し、計画的に獲得する手段であったのだとされている<sup>57</sup>。人間は、その人類史上の大部分の時代において、食べるものを、自然界から直接手に入れてきたことが明らかになっており、狩猟や採集という行動こそが、人間の行なってきた基本的な生産・経済活動となると考えられている。植物と動物に関しては、かつては採集と狩猟から獲得されていたが、ある時期から現在に至るまで、農耕や牧畜によって獲得されてきている。日本における農耕の中でも、かぼちゃが上げられている背景には、かぼちゃの作物としての性質が関係していると考えられる。かぼちゃの原産地はメキシコとガテマラにあたる中南米地域とされており、1541年に大分県に漂着したポルトガル船が運んできたのが始まりであると言われている。かぼちゃにはβ-カロテンやビタミンC、ビタミンE、食物繊維などが豊富に含まれており、免疫力の向上などが期待される。また、日本の気候はかぼちゃを育てるうえで適しており、現代のように様々な肥料や機械がない時代でも簡単に育てることができる食材として広まったと考えられる。したがって、「お寺のおしょうさん」は和尚さんが農作業を広めるという活動を踏まえた歌詞であることから考

えて、和尚さんの重要性を反映しており、さらにかぼちゃを題材にしているということは、その時代背景が深く関わっていると言える。

また、手の動きに関しては、〈せっせっせーのよいよいよい〉の部分は2人で向かい合って手をつなぎ、リズムに合わせて手を3回上下に振り、その後手を交差させて3回重ねるといものである。次の〈お寺のおしょうさんが かぼちゃの種を蒔きました〉という部分では1拍ごとに、まず自分の手のひらを打ち、次に打ったその手で空いての手のひらを打つという動作を繰り返し、〈芽が出て ふくらんで 花が咲いたら じゃんけんぽん〉という歌詞に合わせて、両手を使って花の芽を作りふくらませた後に、手を花のように開き、相手とじゃんけんをして終わる。地域や年代によっては、じゃんけんをする前に、忍法を使って空を飛んだり、東京タワーにぶつかるなどのアレンジが加わったものも見られ、それぞれ歌の長さが異なる。しかし、掛け声から芽が出て膨らむまでの過程は共通して親しまれている。このように、じゃんけんをする遊びという側面だけでなく、繋がるような歌詞を作り出し、さらにその歌詞に合った動きを考えるとという活動に展開していくことができる。

手の労働の側面から考えると、この手遊びの題材そのものが人間の生活に直結した内容であり、“財”を作り出すということを表現している。さらに、種を蒔くという農耕の基礎動作を取り入れた手の動きも表現されており、現代にもつながる人間生活の基礎を表していると言える。

#### 4、結論

幼児教育における「手遊び」のねらいや効果は、教育実践の現場で主要にとらえられている手段や方策としてのものだけではなく、多様である。具体的な手遊びの検討によって、歌詞や動作の中には生産活動、文化的要素、感情や情緒などという人間に特徴的な営為が相当取り込まれているということが明らかになった。「手遊び」の多様なねらいや効果の中の「手の労働」としての側面からいくつかの代表的な「手遊び」を検討してみれば、人間固有の文化が反映され、人間の人間らしさを象徴する「手」の役割が重要な位置づけになっていることも明らかになった。その中でも特徴的な観点について以下にまとめる。

##### ① 生産活動がもりこまれた手遊び

「靴屋のおじさん」に見られるような、人間の衣生活に不可欠な生活用品の生産や、「お寺のおしょうさん」のように農作業の中でもとりわけリーダーといった役割のある活動を取りあげた手遊びがある。さらに「山小屋いっけん」では狩猟活動を表す歌詞や動作が取り入れられている。



このように歴史的な生活生産様式を盛り込んだ手遊びが現在にまで伝承されているということが分かる。そして、人間の文化、社会、生活に関する基本的な内容を内包しているものこそが、モンテッソーリらが指摘する「遊び」と一致するものであり、「手遊び」はこれらの要素を多く含んでいる活動であると言える。ここでいう「手遊び」は、将来人間らしく生きるために必要な内容が含まれており、一般的に言われる「遊び」とは異なって、幼児教育の中で位置づけられる「遊び」にあたる。また、人々が人間生活の根源的な「手の労働」を重要視し、親しみのある「手遊び」に取り入れることで、子どもたちに自然な形で伝えていくことができるという効果もある。

## ② 文化的要素を含む手遊び

「大きな栗の木の下で」「靴屋のおじさん」「山小屋いっけん」「お寺のおしょうさん」においては、共通して、コミュニケーションに関する動作や、動物を保護する動作、農作業をするといった生産活動のように、人間の基本的な身体活動が見られる。手遊び歌として人気のある「げんこつ山のためきさん」や「ごんべさんの赤ちゃん」などにおいても同様に、他者を愛する気持ちなどを表す人間固有の言動が取り入れられている。

これらの身体活動は動物が本能的に生まれ持っているものとは異なり、後天的に獲得し、表現していくことができるものである。これらを「手遊び」の中で具体的に、または象徴的に表現することを通して、子どもたちを社会化することができると言える。

## ③ 人間固有の感情や情緒を表現する手遊び

「げんこつ山のためきさん」の中に見られるように、愛情や慈しみなどの感情を象徴的に表現するというような人間の特徴が取り込まれている。さらに「大きな栗の木の下で」「靴屋のおじさん」においても相手を慈しむ気持ちが反映されており、「山小屋いっけん」においては動物愛護の表現も見られる。

人間らしさの象徴と言える身体を使ってこのような感情や情緒を表現することを通して、フレーベルらの指摘するように、幼児教育において人間の人間らしさを発達させるというねらいを達成することができる。

## ④ 比較的新しい成り立ちの手遊び

今回の検討対象とはしなかったものであるが、「やきいもグーチャーパー」や「1丁目のドラネコ」、「いっばんばしにほんばし」のように、歴史的に見れば比較的新しく、教育現場出身者や幼児向けの職業作曲作詞家などによる創作曲もある。これらは保育現場の教師によってアレンジしやすい単純なリズムや音階、歌詞で構成されたもの、またグー・チョキ・パーのような手指の動きを重視したもの、さらに幼児教育においての手段や方策といった活用方法によるものというように、これまで検討してきた歴史的に伝承されてきた「手遊

び」とは異なった新たなねらいをもって創られたものがある。しかし「山小屋いっけん」のように、歴史的要素を含む手遊びの中にも、テレビやラジオを通して広まったとされているものも存在し、これは外国曲が日本に伝わった時期やその当時の日本の状況に影響されている。

以上のように、歌詞や動作から読み取ることができ、歴史的な側面から得られる特徴だけでなく、幼児教育におけるねらい別の活用法から生み出された「手遊び」も存在するということが明らかになった。こうした研究を通して「手遊び」を捉え直してみれば、それぞれの「手遊び」の奥深さを知り、そのものに価値が存在することもまた明らかである。このような文化的遺産ともいえる「手遊び」が、その成り立ちや真意が意識されずして伝わっているという状態では、本当の教育効果を得ることができないと考える。今後はさらに多くの「手遊び」を具体的に分析・検討し、それぞれの特徴を析出することを進め、「手遊び」の存在構造とその価値を明らかにしていきたい。

## 注

- 1 日本幼年教育研究会  
1969年 文部省(現文部科学省)より社団法人の認可を受けた。  
会員となっている幼稚園・保育園は北海道から鹿児島まで33都道府県にあり、その数156園である。  
活動内容としては、春季幼年教育研究会や夏期幼年教育研修会、新任教師ゼミナールなど、教師の資質向上につながる取り組みを毎年行っている。また、日本幼年教育会報やインターネットによる情報発信も行っており、地域、家庭に対しても幼児教育の重要性を伝えていく活動をしている。  
日本幼年教育研究会HP <http://jape.or.jp/>
- 2 児嶋 輝美「手遊び歌の種類と成り立ちについて」徳島文理大学研究紀要 第84号 2012年
- 3 児嶋 輝美「保育教材としての手遊び歌の現状と課題—データベースの作成を通して」徳島文理大学研究紀要 第77号 2009年
- 4 前掲2と同じ。
- 5 斉藤 葉子・大木 みどり「イメージと即興表現を引き出すための手遊びの重要性(1)—手遊びの展開例をもとにした保育実践—」羽陽学園短期大学紀要 第8巻 第4号 2010年
- 6 前掲3と同じ。
- 7 『教育学大事典』第5巻 1977年 pp.266-268
- 8 湯川 嘉津美 荒川 智『論集 現代日本の教育史3 幼児教育・障害児教育』日本図書センター 2013年 pp.267-285
- 9 莊子 雅子『幼児教育学』柳原書店 1985年 p.79
- 10 『幼稚園教育要領 文部科学省第26号』2008年3月28日告示 2009年4月1日施行
- 11 莊子 雅子『幼児教育学』柳原書店 1985年 p.129
- 12 前掲11と同じ。 p.125
- 13 前掲11と同じ。 p.125
- 14 前掲11と同じ。 p.125

- 15 森 楸『幼児教育学』福村出版 1992年 p.176
- 16 「保育教材としての『手遊び』に関する一考察」岐阜聖徳学園大学 吉用 愛子・奥田 恵子 2008年
- 17 前掲16と同じ。
- 18 安彦忠彦『新版 現代学校教育大事典 1』ぎょうせい出版 2002年 p.27
- 19 荘子 雅子『幼児教育学』柳原書店 1985年 p.183
- 20 清原 みさ子「幼児期における『手の労働』の教育」九州大谷短期大学 第4巻 1977年
- 21 前掲20と同じ。
- 22 青山 キヌ「近代幼児教育史研究II－日本におけるモンテッソーリ教育の展開とその今日的意義－」長崎純心大学/長崎純心大学短期大学部 紀要第31号 1994年
- 23 前掲22と同じ。
- 24 R.R.ラスク『幼児教育史』学芸図書出版 1971年 p.72、p.74
- 25 前掲22と同じ。
- 26 前掲22と同じ。
- 27 R.R.ラスク『幼児教育史』学芸図書出版 1971年 p.66
- 28 前掲22と同じ。
- 29 安彦忠彦『新版 現代学校教育大事典 1』ぎょうせい出版 2002年 pp.27-28
- 30 小川純生「カイヨワの遊び概念と消費者行動」経営研究所論集 第24号 2001年
- 31 前掲30と同じ。
- 32 上野省策・齊藤浩志『手の労働としての造形教育』pp.22-24 黎明書房 1975年
- 33 森 楸『幼児教育学』福村出版 1992年 p.174
- 34 前掲33と同じ。
- 35 岡田正章『現代保育用語辞典』フレーベル館 1997年
- 36 松原達哉『幼児保育学辞典』明治図書出版 1980年
- 37 茂木 俊彦『保育小辞典』大月書店 2006年
- 38 前掲16と同じ。
- 39 前掲2と同じ。
- 40 前掲5と同じ。
- 41 青木 一『現代教育学事典』労働旬報社 1988年
- 42 子どもの遊びと手の労働研究会  
1973年に設立され、教師、保育士、学童保育指導員、保護者が、子どもとともに遊びや手しごと(ものづくりや工作)に取り組み、豊かな学びと生活を創り出すことを目指している。東京や千葉、愛知、大阪、岡山、洲本など全国各地の支部・サークルを中心に研究・実践が行われている。また、会報『子どもの遊びと手の労働』(月刊)を発行している。  
子どもの遊びと手の労働研究会HP <http://terouken.jp/>
- 43 子どもの遊びと手の労働研究会編『手づくりひろば1 紙でつくろう 粘土でつくろう』p.113 ミネルヴァ書房 1989年
- 44 前掲3と同じ。
- 45 前掲2と同じ。
- 46 前掲3と同じ。
- 47 前掲5と同じ。
- 48 前掲2と同じ。
- 49 文部科学省幼時期運動指針 4. 幼児期の運動の在り方(1) 運動の発達の特性と動きの獲得の考え方  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/undousisin/1319771.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm)
- 50 前掲2と同じ。
- 51 前掲2と同じ。
- 52 前掲3と同じ。
- 53 前掲3と同じ。
- 54 「セサミ・ストリート」公式HP  
<http://www.sesame-street.jp/about/history.html>
- 55 前掲54と同じ。
- 56 前掲16と同じ。
- 57 末原 達郎「食料生産と社会構造－人間にとって食料とは何か(1)」京都大学生物資源経済研究 第17号 2012年